

令和元年6月24日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H02605

研究課題名(和文) つっかえタイプの非流ちょう性に関する通言語的調査研究

研究課題名(英文) A cross-linguistic research on getting-stuck disfluency

研究代表者

定延 利之 (sadanobu, toshiyuki)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50235305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,900,000円

研究成果の概要(和文)：文字言語より音声言語が基礎的なものであることは多くの言語学者に認められているが、実際の研究は文字言語が中心で、日常会話の非流ちょうな発話の研究は多くはない。この研究は非流ちょう性を音声言語の宿命と認め、これに文法的な観点から光を当てるものであった。過去の研究は形態素の音韻的複雑さが非流ちょう性のパターンに影響すると指摘しているが、これとは別に、我々は言語の膠着性の高低が、形態素内部でのとぎれ型続行方式のつっかえの自然さに影響するという仮説を提出し、韓国語・シンハラ語・タミル語・中国語・トルコ語・ハンガリー語・フランス語についてこの仮説の妥当性を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我々が普段何気なく話している発話は、母語話者といえども非流ちょうであるが、かなりの秩序があり、言語のタイプごとに違いが見られるということを実際に示した。日本語をはじめとする膠着語(こうちゃくご)は、聞き手にとっては、語を理解しても文を同時に理解することができず、格助詞のようなことばを聞くまで文理解が進められないという、「待たされる言語」である。この言語の話者は、自分が得た語の情報を、文理解が可能になるまで心内バッファ(一時貯蔵所)にとどめておく能力が鍛えられているので、「ブルキナファソ」を「ブルキナファソ」と言うような、入力のおかしな語がまかり通るのではないかと、というのが仮説の内容である。

研究成果の概要(英文)：The fundamental status of spoken language relative to written language has been acknowledged by many linguists. However, actual research on language has focused on the written form, and there are very few research on natural disfluent speech in daily conversation. This project sheds light on the inherent disfluency of spoken language from a grammatical point of view. Previous research has pointed out the possibility of relevance of morphological complexity to the plausibility of disfluency patterns. Apart from this, we suggest that the degree of agglutinativity of a language also affects disfluency. According to our Agglutinativity Hypothesis, a high degree of agglutinativity of a language tends to allow for a [prolongation + continuation] type of disfluency within a single morpheme. We showed this based on observation of Chinese, French, Hungarian, Korean, Sinhalese, Tamil, and Turkish in addition to Japanese.

研究分野：話しことばを中心とする言語学

キーワード：非流ちょう性 通言語的 つっかえ 膠着語 日本語 話しことば 文法 延伸型続行方式

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

20世紀以降の言語学は、規範主義を脱し、現実重視の記述主義で進んできた。また、文字言語よりも音声言語を基礎的なものと認めてきた。だが、非流ちょうな発話には注意が向けられていなかった。わずかに、大規模コーパスを用いた計量的な非流ちょう性研究が、非流ちょう性のパターンには、当該言語の形態素の構造の違いが影響するという仮説を述べている程度であった。

しかし、非流ちょう性は、音声言語の宿命的な傾向である。というのは、多くの場合、文字言語と音声言語の違いは、単なるメディア(文字・音声)の違いで終わらないからである。人間が文字を読む速さが書く速さを大きく上回るため、書き手と読み手はふつう、同じ場に共在しない。また、文字は遠方への運搬・長期の保存が比較的容易である。これらの事情は文字言語を、どこの誰に読まれても差し支えない一般的な知識を、きちんと語る言語にしがちである。これはあくまで傾向だが、文字言語が文字言語であることから導かれる、いわば宿命的な傾向である。文字とは対照的に、人間が音声を理解する速さは、音声を発する速さにたいしてい合わせられる。このため、話し手と聞き手は同じ場に共在しやすい。また音声は話す瞬間にその場で消えていくはかなさを持っている。これらの事情は音声言語を、対面型のコミュニケーションの言語にしがちである。これは、音声言語は本来、相手の反応を見ながらその場で即時的に、つまり推敲や事前の練習無しで発せられがち、非流ちょうになりがちだということでもある。この非流ちょう性は、音声言語が音声言語であることから導かれる、宿命的な傾向である。

日本語には話し手のきもちやキャラに応じて、実に多様な「つかえ方」があるが、他言語では必ずしもそうではないという感触を得ていた筆者は、つかえ方を中心とした非流ちょう性発話の通言語的研究を思い立つに至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本語に似た諸言語のつかえ方の調査、さらに日本語とあまり似ていない諸言語のつかえ方の調査を通じて、言語を越えたつかえのあり方を解明するという、これまででない目的を持つものであった。さらに、つかえの研究を大幅に進展させることによって、「非流ちょう性」の研究全体を活性化させ、自然な音声言語の文法の開拓に貢献しようとするものであった。

つかえ方の言語対照は、具体的には、「膠着性の高い言語は、形態素内部で延伸型統行方式のつかえが容認されやすい」という仮説(膠着性仮説)の妥当性をめぐるという形で展開されることになった。日本語と「膠着言語的」「基本語順がSOV」「pro-drop言語」といった文法的な特徴を共有しているトルコ語・朝鮮語・タミル語・シンハラ語・ハンガリー語について、また、これらの共通特徴を持たないフランス語と中国語について、つかえの調査研究をおこなうこととした。

### 3. 研究の方法

先行研究である上述のコーパス研究には、データの判断基準が漠然としている点が多いと見つけたので(たとえば破裂音の前にとぎれがあるように思える発話データについて、それが本当に「とぎれ」なのか、あるいは破裂音を長い時間をかけておこなっているために閉鎖部分が目立った「延伸」なのかを判断する根拠は述べられていない)本研究ではこの方法論を踏襲せず、我々独自の方法論で調査をおこなった。

第1の調査として、高膠着性の諸言語を対象に、文法的境界でない箇所での延伸の有無を観察した。対面式録音ブース(ガラス窓のある壁で隔てられた2室の防音室、YAMAHA AVITEX)に各言語の母語話者2名に入ってもらい、相手と対面しながらという、なるべく自然環境に近い状況で数時間の会話音声を得て、その中に、形態素の内部で延伸型統行方式のつかえが現れるか否かを観察した。観察対象は、日本語の他、文法的な特徴を共有しているトルコ語・朝鮮語・タミル語・シンハラ語・ハンガリー語である。

第2の調査は、話者間の個人差という問題を解消するためのもので、これは、実験参加者に複数個の発話音声を聞かせて、それぞれ本物の電話対話の発話か否かを判断させ、「本物でない」と判断した場合はその理由も自由記述で答えさせるというものである。すぐ下で述べる理由により、発話音声はいずれも現実の会話から採集されたものではなく、それぞれの言語ごとに、同一人物によって演じられたものである。(特に電話対話の発話としたのは、対話相手の発話音声がか聞こえないことを実験参加者に納得させるための設定である。)準備された発話音声のうち、1つの発話音声だけは、形態素内部に延伸型統行方式のつかえを含んでいる(以下この発話音声を「問題の発話音声」と呼ぶ)。問題の発話音声は、まさに「ここがおかしい(つまり形態素内部での延伸型統行方式のつかえに違和感がある)」という理由で「本物でない」と判断されるか否かを調べるのがこの調査の目的である。問題の発話音声は、延伸型統行方式のつかえではない他の理由により「本物でない」と判断される可能性を考慮して、問題の発話音声と似ていながら延伸型統行方式のつかえだけは含まない発話音声も作成し、(問題の発話音声を聞かされていない)別の参加者に聞かせ、「本物でない」と判断される程度を比較した。問題の発話音声を現実の発話から採集せず、演じて作成したのは、この比較において、現実の発話と演じられた発話の違いを考慮しなくて済むようにするためである。また、そもそも演じられた発話音声は「本物」という判断をどの程度得られるのか、逆に言えば「本物でない」という判断がどの程度つきまとうものなのかという当該話者の「技能」、さらにその「技能」が発揮された疑似電話発話の中で問題の発話音声はどの程度もっともらしく聞こえるのかを見るため、延伸型統行方式のつかえを含まない演技発話を2つ作成し、これも併せて参加者に聞かせ、本物か否かを判断させた。観察対象は、日本語・トルコ語・朝鮮語・タミル語・シンハラ語・ハンガリー語の他、日本語と共通の文法的特徴を持たないフランス語・中国語である。

### 4. 研究成果

いずれの調査においても、膠着性によると思われる影響が観察された。すなわち、観察した高膠着性言語はすべて、会話内に、形態素内部で延伸型統行方式のつかえを含む発話を確認できた(調査1)。さらに、調査対象者が或る程度の数にのぼった日本語・フランス語・中国語において、形態素内部での延伸型統行方式のつかえを理由とする違和感の指摘が、日本語で49人中1人とどまる一方、フランス語で42人中3人、そして中国語で64人中8人という差が得られた(調査2)。もちろん、演じられた電話発話の出来具合が、言語間で揃っているという保証は無い。「発話を聞いて本物の電話発話か否かを判断する」という課題も、参加者たちがこれまで全く経験したことのないものであろう。そのため、いたずらに猜疑心をかき立てられた参加者が、実際の電話会話にもよく見られる発話特徴を、本物でない発話の証しと誤認してしまうといったこと、あるいはそもそも発話のあちこちに注意が分散して適切な判断ができないといったことが、課題遂行の中で生じた可能性は否定できない。しかしながら、上述の言語差が、そうした事情に全て還元し尽くされるとも考えにくだろう。いま述べた問題は、この研究の中で培われた国際的な研究者のネットワークの中で、今後さらに改善をはかっていきたい。

その他、研究を進める過程で、非流ちょう性、ひいては音声言語の文法についても様々な進展を見た。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

- [1] 定延利之 2019年3月 「言語行為への言語学的接近: 権利・きもち・非流ちょう性・面白さをめぐって」『社会言語科学』第21巻第2号, pp. 4-17.  
[https://doi.org/10.19024/jajls.21.2\\_4](https://doi.org/10.19024/jajls.21.2_4)
- [2] 定延利之, ショモディ・ユーリア, ヒダシ・ユディット, ヴィクトリア・エシュバツハ=サボー, アイシュヌール・テキメン, デイルシャーニ・ジャヤティラカ, ドウリニ・ディルシャーラー=ジャヤスーリヤ, 新井潤, 昇地崇明, 羅米良, アントニー・スライラジ, 柳圭相, 朴英珠 2018年9月 「言語類型からみた非流ちょう性: 膠着語と延伸型続行方式のつかえ」『社会言語科学』第21巻第1号, pp. 113-128.  
[https://doi.org/10.19024/jajls.21.1\\_113](https://doi.org/10.19024/jajls.21.1_113)
- [3] 定延利之 2018年5月10日 「オノマトベと感動詞に見られる「馴化」」小林隆(編)『感性の方言学』, ひつじ書房.
- [4] 定延利之 2018年3月30日 「「枝分かれ」に関する覚え書き」日本語音声コミュニケーション, 第6号, pp. 62-82.
- [5] 定延利之 2017年7月4日 「発話が生み出すアクセント」楊凱榮教授還暦記念論文集刊行会(編)『楊凱榮教授還暦記念論文集 中日言語研究論叢』pp. 333-354, 東京: 朝日出版社.
- [6] Sadanobu, Toshiyuki. 2017. 3. " 'BA' in Japanese Grammar and Communication. " In Yasunari Harada, Sachiko Shudo, and Makiko Takekuro (eds.), Papers on and around the Linguistics of BA 2017, Institute for Digital Enhancement of Cognitive Development of Waseda University, pp. 45-58
- [7] Sadanobu, Toshiyuki, and Youngbu Kang. 2016. Dec. " Hesitant word-internal prolongation in Japanese and Korean. " *Orientaliska Studier*, No. 147, pp. 77-92.
- [8] 定延利之 2016年10月10日 「アイデンティティとキャラ」本田弘之・松田真希子(編)『複言語・複文化時代の日本語教育』pp. 235-262, 凡人社.
- [9] 定延利之 2016年9月30日 「日本語文法研究と関連領域との協働: 或る音声言語研究を例に」『日本語文法』第16巻第2巻, pp. 3-19.
- [10] 朱春躍・定延利之 2016 「調音動態から見た「剰余」の声: 日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』第20巻第20号, pp. 91-101.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20\\_91/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20_91/_pdf)
- [11] 定延利之・林良子 2016 「コミュニケーションからみた「剰余」の声: 日本語の慣用句「口をとがらせる」「口をゆがめる」とその周辺」『音声研究』第20巻第20号, pp. 79-90.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20\\_79/\\_article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/20/2/20_79/_article/-char/ja/)
- [12] 定延利之 2016年5月30日 「4つの発話モード」, 庵功雄・佐藤啄三・中俣尚己(編)『日本語文法研究のフロンティア』pp. 205-223, くろしお出版.
- [13] 定延利之 2016年2月1日 「内言の役割語: ことばとキャラクタの新たな関わり」金水敏(編)『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015報告論集』pp. 14-31.  
<http://skinsui.cocolog-nifty.com/sklab/2016/03/2015-42e5.html>
- [14] Tomosada, Kenji. 2015. 12. 30. "The Japanese language and character particles: as seen in dialect" *Acta Linguistica Asiatica*, Vol. 5, No. 2, 51-60.  
<http://revije.ff.uni-lj.si/ala/article/view/4997>
- [15] Sadanobu, Toshiyuki. 2015. 12. 30. "Characters" in Japanese Communication and Language: An Overview, " *Acta Linguistica Asiatica*, Vol. 5, No. 2, 9-28.  
<http://revije.ff.uni-lj.si/ala/article/view/4953>
- [16] 定延利之 2015年10月 「日本語教育に「文節」を活かす」『日本言語文化研究会論集』第11号, pp.1-17.  
<http://www3.grips.ac.jp/~jlc/jlc/ronshu/2015/1toshiyukisadanobu.pdf>
- [17] Sadanobu, Toshiyuki. 2015. 8. "Four types of linguistic resources for variable speaking units in common Japanese." *Journal of the Phonetic Society of Japan*, Vol. 19, No. 2, pp. 109-114.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/19/2/19\\_KJ00010238114/\\_article](https://www.jstage.jst.go.jp/article/onseikenkyu/19/2/19_KJ00010238114/_article)
- [18] 定延利之 2015年5月20日 「日本語コミュニケーションにおける偽のタブーと真のタブー」鎌田修・嶋田和子・堤良一(編著)『プロフィシェンシーを育てる 3 談話とプロフィシェンシー: その真の姿の探求と教育実践をめざして』pp. 6-31, 凡人社.

〔学会発表〕(計 75 件)

- [1] 定延利之 2019年2月17日 「キャラ・面白さ・間を踏まえた文法 ver. 1」日本語音声コミュニケーション学会, 京都大学
- [2] 定延利之 2019年2月16日 「権力・会話・きもち・非流ちょう性を踏まえた文法 ver. 1」日本語音声コミュニケーション学会, 京都大学
- [3] 定延利之 2018年12月3日 「文と発話」(招待講演) 岡山大学
- [4] 定延利之 2018年9月22日 「言語行為への言語的接近: 権利・きもち・非流ちょう性・面白さをめぐって」(招待講演), 社会言語科学会第42回大会, 広島大学東広島キャンパス.
- [5] Donna Erickson, Toshiyuki Sadanobu, Chunyue Zhu, Kerrie Obert, Hayato Daikuhara, and Caroline Menezes. 2018. Sep 8. "An ethnophonetic study of Japanese cake seller voices." *Fifty years of linguistics at the University of Connecticut*.
- [6] Donna Erickson, Toshiyuki Sadanobu, Chunyue Zhu, Kerrie Obert, Hayato Daikuhara, and Caroline Menezes. 2018. Sep 6. "Acoustic, articulatory and perceptual characteristics of Japanese cake-seller voices: A study in ethnophonetics." *Haskins Laboratory*.
- [7] 定延利之 2018年8月4日 「日本語のコミュニケーションと文法におけるキャラ」(招待講演) 大阪YWCA日本語教育セミナー.
- [8] Erickson, Donna, Toshiyuki Sadanobu, Chunyue Zhu, Kerrie Obert, and Hayato Daikuhara, 2018. June 14. "Exploratory study in ethnophonetics: Comparison of cross-cultural perceptions of Japanese cake seller voices among Japanese, Chinese and American English listeners." *Speech Prosody 9*, Adam Mickiewicz University, Poznan (Poland).
- [9] 定延利之 2018年3月13日 「非流ちょうな音声言語の規則性をさぐる」(招待講演), 言語処理学会第24回年次大会, 岡山コンベンションセンター.

- [10] 定延利之 2018年2月3日 「ことばとキャラ」(招待講演),第12回NINJALフォーラム,東京証券会館ホール.
- [11] 定延利之 2018年1月28日 「文字コミュニケーションと状況公開研究会」(講演),公開研究会「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」国立国語研究所.
- [12] 定延利之 2018年1月27日 「非流ちょうな発話への文法的接近」(招待講演),シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア」国立国語研究所.
- [13] 定延利之 2017年12月23日 「語アクセントの規則性:漢字と非流暢性の観点から」(招待講演),『東アジア漢文圏における日本語教育・日本学研究的な新たな開拓』国際シンポジウム,き南大学.
- [14] 定延利之 2017年12月17日 「馴化」からみた感動詞とオノマトベ」(招待発表),感動詞ワークショップ,県立広島大学.
- [15] 定延利之 2017年12月16日 「民族音声学の夜明け」(招待講演)日本語用論学会第20回大会特別シンポジウム,京都工芸繊維大学.[『語用論研究』第20巻,pp.109-113.]
- [16] 定延利之 2017年12月9日 「日本語社会はなぜ発話の非流ちょう性に寛容なのか」(招待講演)外国語と日本語との対照言語学的研究会第23回,東京外国語大学国際日本研究センター.
- [17] 定延利之 2017年10月26日 「環境とのインタラクションに根ざした文法」(招待講演),大東文化大学語学教育研究所講演会,大東文化大学.
- [18] 定延利之 2017年10月1日 「もう一つのパーフェクトらしいタをめぐる」(招待講演)日本語/日本語教育研究会第9回年次大会,大阪大学.
- [19] 定延利之・朱 春躍・Donna Erickson・Kerrie Obert 2017年9月30日 「日本のケーキ屋の売り子調の発声とその印象:日本語母語話者と中国語母語話者の対照から」日本音声学第31回全国大会,東京大学.
- [20] 定延利之・Ayse Nur Tekmen 2017年9月1日 「日本語母語話者発話と学習者発話の非流暢性比較」(ポスター発表) AJE 第21回シンポジウム,リスボン新大学(ポルトガル).
- [21] Erickson, Donna, Toshiyuki Sadanobu, Chunyue Zhu, and Kerrie B. Obert. 2017. Aug. 6. "Ethnophonetics and the Estill Voice Model: Japanese "Street Seller's Voice." " The 8th Estill World Voice Symposium, Quebec City, Canada.
- [22] 定延利之 2017年8月5日 「日常の日本語音声の規則性」(招待講演),大阪YWCA日本語教育セミナー.
- [23] Sadanobu, Toshiyuki. 2017. 7.19. "Characters in Japanese society," IPrA 15, Belfast waterfront.
- [24] 定延利之 2017年4月22日 「非流暢性と発現性からみる日本語母語話者の発話の規則性」(基調講演),第3回全国大学日本語専攻教育の改革及び発展のトップ・シンポジウム,西南民族大学(中国)
- [25] 定延利之 2017年3月3日 「発話の非流ちょう性と権利から見た話しことばの文法」(招待講演)第46回応用言語学講座公開講演会,名古屋大学.
- [26] 定延利之 2017年2月22日 「言語を生み出す煩悩」(招待講演)立命館大学大学院言語教育情報研究科・国際言語文化研究所共催学術講演会.
- [27] 定延利之 2016年12月22日 "Japanese grammar and communication based on 'BA'" (招待講演)JAIST.
- [28] 定延利之 2016年12月15日 「話し言葉からどのように文法を見出すか」(招待講演)早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- [29] Sadanobu, Toshiyuki, Chunyue Zhu, Donna Erickson, and Kerrie Obert, 2016年12月2日, "Japanese "street seller's voice," The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, Honolulu, Hawaii. [The Journal of the Acoustical Society of America, Vol. 140, No. 4, Pt. 2, p. 3400.]
- [30] Sadanobu, Toshiyuki, Ryoko Hayashi, and Chunyue Zhu, 2016年11月27日, "An ethnophonetic approach to Japanese "pursed/curled-lip" utterance," The 1st Meeting of OBK, Honolulu Office of Kobe University, Honolulu, Hawaii.
- [31] 定延利之 (研究代表者) 2016年10月30日 「キャラとキャラ助詞は日本語学に何をもたらすか」日本語学会2016年度秋季大会ワークショップ「キャラ・役割語をめぐる問題とその検討」山形大学.
- [32] 定延利之 2016年10月22日 「音声言語の非流ちょう性とどう向き合うか」(基調講演),グローバル化に基づいた日中両言語の対照及び翻訳研究国際シンポジウム,天津外国語大学.
- [33] 定延利之 2016年10月9日 「体感の観点からみた日本語の「ている」と「た」」(招待講演),電子情報通信学会「思考と言語」研究会,電子情報技術研究報告,第116巻,第242号,pp.19-24.
- [34] 定延利之 2016年9月25日 「発話の権利から見た伝達論的コミュニケーション観の問題」(招待講演),第4回京都語用論コロキウム,京都工芸繊維大学.
- [35] 定延利之 2016年9月18日 「現代日本語共通語のコピュラ・終助詞の韻律と発話構造」日本認知科学会第33回大会北海道大学.
- [36] 定延利之 2016年9月5日 「話し合いに参加する前提となる発言権について言語学的に考える:「話し合う力」と会話内の立場」,新科目「公共」を考えるラウンドテーブル,龍谷大学.
- [37] 定延利之 2016年9月3日 「日本語母語話者の非流ちょう性について」(招待発表),2016 KAFLE International Conference,韓国外国語大学校(韓国).
- [38] Sadanobu, Toshiyuki, and Yongbu Kang 2016年8月17日 "Hesitant word-internal prolongation in Japanese and Korean", NAJAKS 10, Stockholm University (Sweden).
- [39] 定延利之 2016年8月6日 「権利からみた知識と体験」(招待講演)大阪YWCA夏の日本語教育セミナー.
- [40] 定延利之 2016年7月8日 「日本語日常発話は統語構造からどのように自由か?」AIDLG-AJE主催日本語教育シンポジウム,2016年7月8日,ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学.
- [41] 定延利之 2016年3月7日 「日本語のリアルな話し方」(招待講演)ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学(イタリア).
- [42] 定延利之 2016年2月20日 「母語話者のように非流ちょうに自然に日本語を話す方法」(基調講演),スリランカ・ケラニヤ大学日本語研究センター設立記念国際学術シンポジウム「日本語で世界とつながる」,ケラニヤ大学(スリランカ).
- [43] 定延利之 2016年12月23日 「発話構造が生み出すアクセント」(招待発表)外国語発音習得研究会第6回研究集会,広島修道大学.
- [44] Sadanobu, Toshiyuki 2015年12月6日 "Grammar and communication based on man-environment interaction: The case of Japanese in contrast to English." (Invited lecture) Annual meeting of Akita Associations of English Studies, Akita University.
- [45] 定延利之 2015年11月27日 「発話の「ギア」と語アクセント,イントネーション」(招待講演),国語研プロ

ジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」発表会，名古屋大学。

- [46] 定延利之 2015年11月19日 「日本語コミュニケーションの不思議」(招待講演)，神戸海星女子学院高校。
- [47] 友定賢治 2015年11月15日 「方言からみた日本語とキャラ」日本語文法学会大会，学習院女子大学。
- [48] 金田純平 2015年11月15日 「マルチメディアからみた日本語とキャラ」日本語文法学会大会，学習院女子大学。
- [49] 定延利之 2015年10月11日 「文節単位の話し方への文法的アプローチ」2015年度日本語教育学会秋季大会ポスター発表，沖縄国際大学
- [50] 定延利之・林良子 2015年10月4日 「コミュニケーション研究からみた「剰余」の声」日本音声学会第29回全国大会ワークショップ「剰余」の声とそのとらえ方，神戸大学。
- [51] 朱春躍・定延利之 2015年10月4日 「調音動態研究からみた「剰余」の声」日本音声学会第29回全国大会ワークショップ「剰余」の声とそのとらえ方，神戸大学。
- [52] 定延利之 2015年10月3日 「ことばからコミュニケーションを見る」(招待講演)，兵庫教育大学言語表現学会・平成27年度第2回研究会，兵庫教育大学。
- [53] 森庸子 2015年10月3日「日本語の自然発話における句末伸長とリズム」第29回日本音声学会全国大会 神戸大学。
- [54] 定延利之・杜思宇 2015年9月19日 「つかえを発話ボタンとして認定させる話し手の能力」日本認知科学会第32回大会，千葉大学。
- [55] 羅希・定延利之 2015年9月19日 「日本語の相づちの頻度とタイミングに関する総合的考察」日本認知科学会第32回大会，千葉大学。
- [56] 定延利之 2015年8月28日 「非伝達的」な日本語対話能力の存在，パネルセッション「非伝達的」な日本語対話能力の存在・解明・育成，AJE19，ボルドーモンテニユ大学(フランス)。
- [57] 定延利之 2015年8月13日 「日本語学習者の非流ちょうな発話を母語話者の自然な発話に変える：文節を中心に」(招待講演)，EJHIB 2015，サンパウロ大学日本文化研究所(ブラジル)。
- [58] 定延利之 2015年8月1日 「コミュニケーションと日本語教育のつながり：イカゲン(低高高高)はイカゲン(高高低高)」(招待発表)第10回 OPI 国際シンポジウム・パネルディスカッション「日本語教育に求められる多様なつながり」函館国際ホテル。
- [59] 定延利之 2015年7月21日 「上手いか、下手か、それを決める上手い判断：流暢さと非流暢さに関わる一考察」(招待講演)南山大学人文学部講演会。
- [60] 定延利之 2015年7月18日 「非流ちょう性の文法」(招待講演)第14回対照言語行動学研究会「発話行動を言葉に即して考える：発話の実態とそこに見る文法」青山学院大学。
- [61] 定延利之 2015年6月6日 「「表し」と「漏れ」：非流ちょうな発話をめぐって」(招待講演)表現学会第52回全国大会，県立広島大学サテライトキャンパスひろしま。
- [62] Sadanobu, Toshiyuki. 2015年7月4日 "BA in Japanese grammar and communication," (招待発表) The Second International Workshop on Linguistics of BA, Future University Hakodate.
- [63] 定延利之 2015年5月29日 「日本語の動向：グローバル・ネット・若者・キャラ・濡れ衣」(招待講演)東京ドイツ文化センター主催シンポジウム「ことばを活かすものは何?」，ドイツ文化会館。
- [64] 新井潤 2015年5月20日 「シンハラ母語話者のための日本語アクセント習得研究」日本語音声コミュニケーション教育研究会研究集会，ダイバエサーニ。
- [65] 定延利之 2015年5月20日 「韻律説明原理としての枝分かれの方向性への疑問」日本語音声コミュニケーション教育研究会研究集会，ダイバエサーニ。
- [66] 定延利之 2015年5月16日 「日本語の文法と発話状況の結びつき」(招待講演)津田塾大学「言語の対照および類型論的研究の会」主催研究集会「言語における Evidentiality, 'Reality' を考える」，津田梅子記念交流館。

他

#### 〔図書〕(計 6 件)

定延利之 近刊 a 『コミュニケーションと言語におけるキャラ』東京：三省堂。

定延利之 近刊 b 『文節発話の原理』東京：大修館書店。

定延利之(編) 2018年7月10日 『「キャラ」概念の広がりと深まりに向けて』東京：三省堂。(241頁)

定延利之 2016年12月10日 『煩惱の文法：体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話(増補版)』東京：凡人社。(208頁)

定延利之 2016年3月8日 『コミュニケーションへの言語的接近』東京：ひつじ書房。(356頁)

定延利之(編) 2015年5月15日 『私たちの日本語研究：問題のありかどと研究のあり方』東京：朝倉書店。(執筆：石黒圭・岩田一成・岡田美智男・金田純平・菊地康人・北川千穂・金水敏・小林隆・定延利之・下地理則・勅使河原三保子・野田尚史・林良子・船山仲他・前田理佳子・茂木俊伸・森篤嗣・山口治彦、以上19名)(174頁)

#### 〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

#### 〔その他〕

パネルセッション・ワークショップ開催 3件

国際語用論学会第15回大会パネルセッション

Japanese-born "characters" meet European and American insights. 2017年7月19日，ベルファスト

日本語学会ワークショップ「キャラ・役割語をめぐる問題とその検討」2016年10月30日，山形大学

日本語文法学会パネルセッション「日本語とキャラ」2015年11月15日，学習院女子大学

講演会開催 1件 2016年7月20日(水)神戸大学大学院国際文化学研究所

Andrej Bekes「状況のコンテキスト、社会的コンテキストにおけるキャラ・役割語の位置づけ」

鼎談 1件 鎌田修・堤良一・定延利之「鼎談 談話とコミュニケーション」鎌田修・嶋田和子・堤良一(編著)『プロフィシェンシーを育てる 3 談話とプロフィシェンシー：その真の姿の探求と教育実践をめざして』pp. 201-221, 凡人社。(2015年5月20日)

ホームページ [http://www.speech-data.jp/kaken\\_tsukae/index.html](http://www.speech-data.jp/kaken_tsukae/index.html)

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：林 良子

ローマ字氏名：HAYASHI ryoko

所属研究機関名：神戸大学

部局名：国際文化科学研究科

職名：教授

研究者番号(8桁): 20347785

(2)研究協力者

研究協力者氏名：宇佐美 まゆみ

ローマ字氏名：USAMI mayumi

研究協力者氏名：エリクソン ドナ

ローマ字氏名：ERICKSON donna

研究協力者氏名：金田 純平

ローマ字氏名：KANEDA junpei

研究協力者氏名：キャンベル ニック

ローマ字氏名：CAMPBELL nick

研究協力者氏名：坂井 康子

ローマ字氏名：SAKAI yasuko

研究協力者氏名：匂坂 芳典

ローマ字氏名：SAGISAKA yoshinori

研究協力者氏名：朱 春躍

ローマ字氏名：ZHU chunyue

研究協力者氏名：砂川 有里子

ローマ字氏名：SUNAKAWA yuriko

研究協力者氏名：友定 賢治

ローマ字氏名：TOMOSADA kenji

研究協力者氏名：森 庸子

ローマ字氏名：MORI yoko

研究協力者氏名：大和 知史

ローマ字氏名：YAMATO kazuhito

研究協力者氏名：ウィリアムズ J.カティータ

ローマ字氏名：WILLIAMS J. catita

研究協力者氏名：ベケシュ アンドレイ

ローマ字氏名：BEKES andrej

研究協力者氏名：柳 圭相

ローマ字氏名：RYU kyusang

研究協力者氏名：朴 英珠

ローマ字氏名：PARK youngju

研究協力者氏名：ラトナーヤカ ディルルクシ

ローマ字氏名：RATHNAYAKE dilrukshi

研究協力者氏名：ジャヤティラカ ディルシャーニ

ローマ字氏名：JAYATHILAKE dilshani

研究協力者氏名：ディルシャーラー=ジャヤスーリヤ ドゥリニ

ローマ字氏名：DILSHARA-JAYASURIYA dulini

研究協力者氏名：新井 潤

ローマ字氏名：ARAI jun

研究協力者氏名：スサイラジ アントニー

ローマ字氏名：SUSAIRAJ antony

研究協力者氏名：テキメン アイシュヌール

ローマ字氏名：TEKMEN ayse nur

研究協力者氏名：アヴダン ナーゲハン

ローマ字氏名：AVDAN nagehan

研究協力者氏名：ヒダシ ユディット

ローマ字氏名：HIDASI judit

研究協力者氏名：エシュバツハ=サボー ヴィクトリア

ローマ字氏名：ESCHBACH-SZABO viktoria

研究協力者氏名：ショモディ ユーリア

ローマ字氏名：SOMODI julia

研究協力者氏名：オバート ケリー

ローマ字氏名：OBERT kerrie

研究協力者氏名：メネゼス キャロライン

ローマ字氏名：MENEZES caroline

研究協力者氏名：昇地 崇明

ローマ字氏名：SHOCHI takaaki

研究協力者氏名：大工原 勇人

ローマ字氏名：DAIKUHARA hayato

研究協力者氏名：羅 米良

ローマ字氏名：LUO miliang

研究協力者氏名：羅 希

ローマ字氏名：LUO xi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。